雄島周辺の動植物散策記

松　村　忠　祀

１０年も前のことであるが、私が県立図書館に勤めた頃の御泉水の生物相は、町中の環境とは思えない多様な条件を含めていた。

池には、東の隅から適量の水を湧水のように注ぎこみ、西北の隅へと遊水して落とす仕組で、江戸時代中期頃の作庭地割を今に遺している史跡である。

池の周辺にはハンノキ、エゴノキ、ムラサキシキブ、クサギ、アカメガシワ、エノキ、タブ、カシ等が自生し、共存した形でフジ、クズ、ヘクソカズラ、カナムグラ、カラスウリ等のツル性植物が繁茂して、越前平野の各所で見かける植生の縮図をなしていた。

毎年１０月下旬になると各種の鳥が観察でき、カルガモのような大型の水鳥が、何１０と群になって飛来する時が再三あった。あるいは、カワセミの美しい姿をよく見かけることができた。

このように市街地でありながら、御泉水のよく自然に回帰しつつある環境に接し、私は何時ともなくこのあたりで見られる動植物について、メモを付けるようになった。最初は、御泉水周辺のメモであったが、次第にメモの範囲が広まり、通勤道中の動植物に関し、興味を持ちはじめていた。

そこで、メモ帳の中から雄島及びその周辺地に限り、気紛れな内容の記録を辿りつつ、春から夏に見かけた、四季上半期にあたる季節の動植物考についてふれてみることにする。

雄島周辺に春を告げる１番鳥は、マツ、エノキの梢を借りて囀りはじめるホオジロとシジュウカラの雄である。彼らの相聞歌はこの頃から聞くことができる。大体、２月１７日前後、よく晴れた日に鳴きはじめる。２月中旬頃はまた、ヤブツバキの花の個体数が俄に目立ちはじめ、葉肉に春色を感じさせるハマウドがある。ホオジロに合わせるように囀り出すのが、海岸に棲息するイソヒヨドリで、鳴き声は美しい春の響きである。

下旬に入ると、雄島及び陣ケ岡の小松原周辺のよく陽が当る場所で、早い年は２月２０日前後にキジが鳴き始める。ツグミもこの頃、夕方になると定まった落葉樹等に小群をつくるようになる。

３月上旬、暦の上からは春になり、植物ではツクシ、スギナ、ニワトコ、ヨモギ、セリ、オニユリ等の芽が目につき、またこの時期はキイチゴの芽も伸びはじめ、モズが囀り出す。

中旬、３月１５日前後イワツバメが飛来する。ガンの飛去は昭和４６年３月１７日に６羽を確認した記録があり、ちょうどこの時期が北へ飛去周期に当るのかも知れない。島内に自生するオニユリの芽は５～６cmに伸び、ニワトコは3cm位に芽を出しはじめる。ウミウ（秋に飛来し、春に飛去するが、雄島の南側断崖及び安島地籍東尋坊寄り断崖は夜、羽を休める場所である。）はこの時期になると、磯の岩上に群れるようになる。ヤナギは小さい可憐な芽をふくらませる。スミレの仲間も花をつけはじめる。

下旬、雄島及び陣ケ岡一帯のヤブニッケイ、シロダモ、ヒサカキ、ツバキ、タブなどの常緑広葉樹とアカメガシワ、エゴノキ、ミズナラ、エノキなど落葉広葉樹が占める混交林で、ウグイスの鳴き声を耳にすることが多くなる（御泉水では、昭和４７年２月１６日ウグイスの初鳴を記録している）。ハマボウフウも３月２８日頃になると、三国町新保、浜地などの砂浜にわずかに葉を開く。

４月初旬、ウグイスの鳴声をいたるところで耳にする。クロツグミが南風の強く吹く日に飛来し、キョロ・キョロと美声を競って囀り出す。雄島では昭和４８年４月８日確認した記録がある。ムシクイの仲間は、クロツグミより少し早い４月５日前後、シイ、タブ、ツバキ、ヤブニッケイなど常緑広葉樹林の梢を渡る。三国町陣ケ岡一帯の松林で、ゼンマイ、ワラビが土を割り、４月１０日頃、5cmから１０cm程の長さに伸びる。キイチゴが花をつける。

中旬、南風の吹くフェーン現象の日など、南からの渡鳥が飛来する。飛来する鳥は、ヤブサメ、キビタキ、ルリビタキ、コサメビタキ、サメビタキ、エゾヒタキ、エゾムシクイ、オオルリ、センダイムシクイ、コルリ、クロツグミ等である。雄島の植生であるヤブツバキ、タブ、ヤブニッケイ、シイ、モチノキなどの照葉樹林は、羽を休め、採食する上で彼ら渡鳥（ヒタキ科・ツグミ科・ウグイス科）にとって絶好の場所になると思われる。この点、マツなどの人工林では、彼らをあまり確認できない。私には、ヒタキ・ツグミ科などの一部は日本海側の照葉樹林の分布に沿って、海岸線を北上することも考えらえる。シロダモの芽が伸び始め、タラの芽は5cm程に伸びる。ヤマゴボウの芽も４月１８日頃になると１０cm前後に成長する。アカメガシワの小さな赤い芽は1cm前後に伸びはじめ、地味なようで可憐な美しさがある。陣ケ岡一帯の谷間にある水田で、カエルが鳴きはじめるのは、４月１３・１４日前後である。昆虫では、モンシロチョウが目につきはじめる。

下旬、マツ（クロマツ）の芽が４月２１日頃になると７～8cmに伸び、中にはそれ以上の長さになって、可愛い緑の葉を出しはじめる。ヤマツツジ、フジ、キリの花が咲きはじめる。マツゼミ（ハルゼミ）は４月２７・２８日前後のよく晴れた日に、松林で鳴きはじめる。シギ・チドリの仲間が、坂井平野の水田に群で飛来する。メジロ・ヒヨドリが群をなして奥越等の低山帯へ移動をはじめる。三里浜、浜地の砂浜ではシロチドリが産卵をはじめる。

５月初旬、マツの花が咲きはじめ、シャリンバイ、トベラが咲きはじめる。５月６日前後の南風の吹く頃、サンコウチョウが飛来する。昭和４８年５月６日雄島の林中で３羽を確認している。アザミの花が目につき、小川のコイ、フナの淡水魚の産卵期に入る。また、キジ、カルガモの抱卵期に入る。このころは落葉広葉樹林の新緑が鮮やかな季節となる。

中旬、サンコウチョウはこの頃にも時々３・４羽飛来し、ムシクイもよく渡る。トベラが一面に咲き、この地方の漁村ではトベラの花をタイバナと呼び、鯛がよくとれだす。タイなどの仲間が、産卵のため島の近くへ回游する時期である。ベラ科の魚も磯へ回游するのか、よく見かけるようになる。シイが花をつける。

下旬、キイチゴの花が咲くようになり、エゴノキの白い花が下に向って咲きはじめる。マミジロの飛来がはじまり、雄島の林中で見かけることがある。記録によれば、昭和４８年５月２７日雄島で確認している。

６月上旬、ホトトギスが飛来する時期で、風のない静かな夜、その鳴き声を聞く。昭和４７年６月６日雄島で確認する。キジのヒナがよく目につき、スズメ大のヒナに成長、雄島に自生するノハナショウブの花が咲きはじめる。

下旬、ホタルが飛びはじめるのは、２５日前後である。アカメガシワの花は６月２０日頃見ることができる。２８日前後になるとネムの花が各所で咲き、ユリの種類も花をつけだす。ネムの花は私にとって、最も夏らしい感じをうける植物である。

７月上旬、ニイニイゼミは夏を告げる最初の声で、７月３日頃に初鳴を耳にする年もある。平均５日、６日に鳴きはじめている。キリギリスもこの頃になると、ススキ、クズなどの草叢で鳴きはじめる。

中旬、アブラゼミ、ミンミンゼミは、平年梅雨明けの２０日前後に確認することがある。早い年は昭和４６年７月１５日北潟地籍で確認した。秋蟬と称されるツクツクボウシも、早い年は昭和47年７月１７日雄島で記録している。

下旬、陣ケ岡の松林などに自生するハギが花をもちはじめる。

８月上旬、クツワムシが１０日頃鳴きはじめ、コオロギも鳴き出す時期である。

中旬、ムラサキシキブが咲きはじめ、ハギが一面に花をつける。クツワムシ、コオロギ、スズムシなどが夜の風物誌を奏でる。

下旬、ススキの尾花が、２２日頃には見られ、秋を視覚に写す。２８日頃になるとタラノキが花をつけはじめる。鳥では南からの夏鳥が再び南に帰る。一番鳥か、雄島で昭和４８年８月２９日ルリビタキを確認する。モズが梢で尾を振りながら鳴きはじめる。秋が来た。

（県文化課）